

定禅寺ジャーナル ウェブ版 デイバート編  
第四回 「震災と祭り」

2011年7月26日 18:00~19:45

さんだいいメディアアテーク2F 「3がつ11にちをわすれないためにセンター」

門脇 「定禅寺ジャーナル ウェブ版」の時間です。みなさん、いかがお過ごしですか。私は今、仙台市青葉区定禅寺通り沿いにある「さんだいいメディアアテーク」2F「3がつ11にちをわすれないためにセンター」にきています。もうお馴染み「定禅寺ジャーナル」編集長・鈴木太さんと今日もお送りしていきます。

鈴木 だんだんうちの本が売れなくなってきた。いい傾向です。

門脇 鈴木さん、定禅寺通りと言えば、先々週、たいへんなことがありましたね。

鈴木 何ですか。

門脇 ここに六つの魂が集まったそうなんですけれども、その魂が…。

鈴木 魂なんでもともと最初からなかったんですよ。「零魂祭」というのは聞いてましたけど。門脇 「六魂祭」、ご存知の方もいらっしやると思うのですが、聞いたことのない方や「え、零魂祭なの？」という方のために、私の方から少

し説明しましょう。

あれは7月16・17日のことでした。この仙台は定禅寺通りに東北6県の県庁所在地の祭りを呼んで来ようという企画が行われたんですね。発案者としては青森市長、そしてそれを受けて仙台市長が「やろうじゃないか」ということで、仙台では「七夕」、青森では「ねぶた」、秋田では「竿灯」、盛岡「さんさ」、そして山形の「花笠」、福島の「わらじ祭り」というランナップで行われたんですが、報道によりますと「一部中止」ということでしたね。

鈴木 「一部中止」というか、あれでまともだったんじゃないかなと。準備もろくにできなかったというのもあるんだけれど、なし崩し的にやっちゃったのはいいんだけど、「ページェント」(※「SENDAI光のページェント」)の時と同じでトラブルの後の始末というのが全然駄目だったという点では、去年と何も変わらず、学習能力がなかったなと、そういう感じです。

門脇 「六魂祭」は今回の震災を受けて初めて行われた企画なんですけど、1日の入場者を5万人、2日で10万人と予想していたのに対し、2日で36万人が来てしまった。これにより警察との協議の結果、大物である「ねぶた」「竿灯」などが1日目は中止、2日目は縮小しての実施となったわけです。

ということ、今回は「震災と祭り」というテーマでお送りしたいと思います。コミュニティにとって祭りというのは非常に重要な意味を持っています。震災から立ち直っていく上でももちろん重要な意味を持つてくるでしょう。そんな中で行われた「六魂祭」。これを手がかりにしながら今日は考えてみたいと思っています。

さて、「六魂祭」、「一部中止」ということだったんですが、私はこれが「正解」だったと思うんですね。例えばあれが予定調和的に「素晴らしい祭りだった。仙台で見るねぶた、最高！」みたいになってしまったら、ねぶたを青森でやる意味がないですね。

鈴木 促成栽培された野菜があちこちに出回るといふのと変わらないと思います。いろんな駅の駅弁が今デパートで食えたりするじゃないですか。現場に行ったらこそおいしく食べられるもので、三越あたりで食べたってあんなの冷たくなっておいしいなんて思えませんよ。現地でご食べられるものは現地で食べた方が臨場感もあるし、ありがたみもある。

門脇 鈴木さんは駅弁の状況にたとえて祭りの持つローカルティとか場所性——その場所を離れてしまったら意味を失ってしまう——をうまく表現してくれたわけですが…要するに「祭り」じゃないんじゃないですかね、これは。

鈴木 そう、「祭り」でもなんでもない。6 県集めてやるということで、道州制とかそういうことをやりたい連中がプロパガンダ的に考えた部分があると思います。震災を機に非常にいやらしいというか、どさくさまぎれに変な企画を持って来たなあ。これも当然のように電通あたりがからんでいて、でもポスターなど見ても「電通」の「で」の字も載ってない。相変わらずどさくさまぎれに暗躍しているなど気分が悪くなっています。

門脇 道州制を見据えて、既成事実化していくと読みましたか。

鈴木 青森市長というのは道州制を主張している人なんです。大阪府の橋下とかいうふざけた府知事がいますけれど、ああした連中と同じ考えの人たちです。「六魂祭」がただどうだというだけでなく、その裏になにかあるのか——だって青森のあのおやじがねぶたをこんなところを持って来たって何のメリットもないんですよ。青森に行く人だって減っちゃうわけだし、しかも今回評判がめちゃくちゃ悪くなったでしょう。それでもなおやるというのは何かがあるからなんですよ。

門脇 ひとつの説明としては、これはプレなんだ。これから8月にかけて各地で行われる本祭に来てもらうための呼び水なんだという話だ

ったんですね。それが呼び水どころか……でも、「やっぱり他でやっても駄目なんだ」「ねぶたは青森で見なきゃね」となったのはよかったのかもしれないですね。

鈴木 ねぶたは青森市内だけじゃなくて、黒石には黒石のがあるし、五所川原には五所川原のがあるし、結局、代表として出て行った連中が代表としてやり切れなかったということに関して相当たかかっているんですよ。これはこちら側でのミスもいろいろあったんでしようけれど、ただ駄目だったという事実だけは残るわけですから、他のところはほとんどメリットがなかったんじゃないかと思えます。

門脇 結局、これは「祭り」ではなくて「イベント」だと思うんですね。私はアートのプロジェクトもをやるんですが、その時よく「イベント」あるいは「アートイベント」という言い方をすることがあります。ここで少し用語を整理しておく、私は「イベント」というのを否定的な意味合いで使っています。一過性のもの、客寄せのために行うもので、下から起こって来たものというよりも商店街や行政が上の方から一発で知名度を上げようというようなもの。これに対して本来的な祭りであるとか、私が取り組んでいる「コミュニティアート・プロジェクト」——ちよつと長いので「アート・プロジェクト」とか「プロジェクト」と呼んでいます。は、日々その地域の人と顔を合わせながらやっていくことで、その地域、そのコミュニティ独自の何か生まれて来るものです。それはよそこから来た人には全然わからないかもしれないし、ある意味「ショボイ」ものかもしれないんですが、やっている人、参加している人には意味があるというものです。そういうものこそが本来的な祭りであり、その土地ならではの取り組みであると思うんですね。そうしたものはイベントというかたちの中にはないと思います。

鈴木 「祭り」は狂うことだと思います。「狂う」とかいうとすぐに差別用語だとか言われてしまふんですけども。お祭りというのはだいたい五穀豊穡祭もそうですし、長野の諏訪の御柱祭にしてもそうですけれど、ある種狂気の世界なんです。

門脇 死人が出たり。

鈴木 それだけ祭りに対して集中するとか、下準備もそうですけれど、俺たちこれでこの土地で生きているんだという信念とか、そういうものが伝わってきます。諏訪の御柱祭は、上諏訪と下諏訪それぞれでやりますから、日にちをずらしてやるんですよ。しかも死者が出たりする非常に過激な祭りなので、7年に一遍しか警察から許可も出ないくらいのもので、岸和田の

だんじりなんかもそうですが、危ないとわかっていながら命がけに近い状態でやっています。はたから見るとなんでこんな危ない金にもならないことをやるのかなというのですが、当事者にしてみれば長い間そこでずっとやってきた気持ち、人間が動物であることを示す大事な催しなのだと思います。

門脇 一方では本能的なものでもあるわけですが、その一方でお金にもならないどころではない、財産もはたいてやるような社会的なものもあるんですよ。その地域でその地域のために血を流しながらでもつくっていく祭りに対して、今行われた「六魂祭」はいいとこどりで、決めのポーズだけを集めたようなものと言われるても仕方がないですね。

鈴木 「冒険」というところをはしょっちゃってるんじゃないですか。途中の冒険があつてようやく祭りというものが出てくるはずなのに。門脇 鈴木さんが言う「冒険」になります、私に言わせればコミュニケーションや交渉など地道な営みですね。人が大きなことをするわけですから、いろいろな意見の対立もあるでしょう。それを乗り越えることによって何か新しいことが生まれて来る。だから外から見ると同じようなことをやっているように見えても実は新陳代謝が行われているようなところがある。そ

れが祭りであつて、型をたどるようなものではないと思うんですよ。そうした意味で、今回、うまくいかなかったことが成功だと思つたわけですが、ただ「あんなことやつて馬鹿だよ」と結論つけて終わりにしてしまつても後ろ向きです。でちよつと違う視点から見たいと思います。

うちの塾の子のおばあちゃんが岩手の北上なんだからです。今回の「六魂祭」を非常に楽しみに仙台まで来て、自分のところの北上の「鬼剣舞（おにけんばい）」を見てもものすごくはしゃいでいたと言ってますね。おばあちゃん、自分のところで本物が見られるんじゃないのと子どもに聞くと、どうもそういうことではなくて、自分のところの祭りを外でやっているのがうれしいらしいんですね。自分のところの祭りをよそで見せる。そのデモンストレーション的な欲求というのは、今回、市長さんたちなり広告代理店なりが目論んだものと、庶民が望んだものが結局のところ同型であるということでしょうか。

鈴木 今、話を聞いていてうらやましくなりました。というのは、私の故郷の山形は「花笠祭り」なんですけれど、正直言つて私嫌いなんです。もともと古くからあるものではなく、ある特定の道路交通会社と県の裏のどろどろしている部

分やいやらしい部分から発生して来たといういわくつきの祭りなので。北上のその方は本当にそういう風に思つたと思ひ、私としてはうらやましいなと。

門脇 なるほど、そう受け取りましたか。私は、そうしたどこでも流通可能というコンビニ的なものを実は庶民のみなさんも欲しているのではないかという風に受け取つたんですね。権力や仕掛け屋が無理無理つくつたものというよりは、みんなも欲している欲求、どこでもおんなじサービスが受けられる欲求を満たしたものに過ぎないのではないかと。

鈴木 付和雷同的で、聞いていて非常に嫌になります。そういうのがいいという人が多いというのも事実なのかなという気がします。だからといって時代が変わつたとかいう風にも思いません。そういう安易なことを言う方がつっこいますけれど、時代なんてそんなに変わりません。時代が変わつた変わつたと言われてますが日本でもそんなに発展してないと思う。変わったというふりをしてるだけで実際は変わっていないと思う。

門脇 コンビニもそうだし、ファミレスや百均などどこへ行つても同じサービスを同じ値段で受けられます。こういうのに常にさらされてい

ると、じゃあ祭りだって安く簡単に手に入るんじゃないかと、すんなり思ってしまうところがあるのかなと。

鈴木 卵の自動販売機が出た時に、都会の小学生はりんごやさくらんぼの自動販売機も田舎にはあるんだと思いでいたという話があつて、非常に怖いなと思いました。

門脇 どこがきっかけであるかとかいうよりも、そういう流れがあるということではないでしょうか。「六魂祭」に36万人、予想の4倍近い人が来るということは、何らかの魅力をみんなが感じていたわけですよ。

鈴木 ここで間違っちゃいけないのは、「予想より」と言っても役所や電通はたいがい見込みがはずれるじゃないですか。予想通りかかないから明石の花火でも死者が出たりとかしているわけだから、それは間違うと思う。

門脇 予想が外れた外れないという話をしているのではなくて、何十万人という人が楽しみにして集まって来たということは、そこで地域の伝統的な祭りを見たいというのではなく、コンビニ的・マクドナルド的に祭りを消費したいという人がそれだけいたということではないでしょうか。みんなが「祭りというのはその地域のその時期に見なければ意味がないよ」というのであれば来ないわけですよ。ところがあんな

に来てしまったということは、もうそういうところまで現実的に来てしまっているということではないでしょうか。

鈴木 ますます日本が嫌になってきましたね。

門脇 嫌になるような見方しかできず申し訳ないです。例えばフランス革命の後には革命政府がいっぱい祭りをつくったらしいんですね。国家事業的に——鈴木さんの用語で言えばプロパガンダ的に——国やコミュニティが求心力を得るために祭りやイベントがつくられていく。そういう風に考えれば今回の「六魂祭」にしても、震災を機に道州制に向かわせたり、あるいはそこまでとりあえず我々はリーダーシップを発揮してますとアピールするような政治ゲームの場になつている。

鈴木 点と点というのはあるんですよ。それがどのように線で結ばれているのかということ、国民はもうちよつと見ていかないとけないと思う。一般の人というのはそこまで正視・精査しなくてもいいけれども、上にいるような人というのは一を言われたら十くらいピンと来なくても0・1もわからないというのでは…仙台市議会や宮城県議会には、果たしてそこまでピンと来る議員がいるのかというと、いないと思います。

門脇 直接、得意げに「私が発案しました」みたいな発言を聞くと、これは何かあるんだろうなと。

鈴木 けれどそういうことを言った連中は、終わった後も「私がやったんです、失敗しました、ハハ」とは言わないでしょう。言うなら、私も御見せしましたと言いますよ。

門脇 言わないでしょうね。見込みが外れたというか。

鈴木 見込みを外さないのなら、県知事なんてちんけなもんやりませんよ。国政を目指すか総理大臣を目指していますよ。東国原だって県知事できるんですよ。あの人のことをいいとか悪いとか言っているんじゃないんだけど。つまりほんのちよつとということをやればできるんですよ。村井さんは私と同じ釜の飯を食った自衛官でしたが、その割りに一体何をやっているのかなと。

門脇 タレント議員とかタレント知事が出るというのは、民主主義のあやうさでしょうか。

鈴木 それもあるし、多数決というのが必ずしもいいとは言えない場合があるじゃないですか。考えが全然違うのも多数決で可決してしまつたら、それが結局太平洋戦争へ進んでしまつたということにもつながっています。

門脇 いろんな組み合わせの多数決ができない

んですかね。

鈴木 全体主義と民主主義は表裏一体的なところがあるんですよ。本当は同じ穴のむじなに近いんですよ。それがわからないとだんだん見えなくなっていくんじゃないかなと。

門脇 それを歩き来しているということでしょうか。

鈴木 そうです。中国の場合も社会主義だと言っているけれど、やっていることは完全に資本主義じゃないですか。とりあえず何とか特区とかいうインチキを香港にしても上海にしても北京にしてもそうでしょう。それ以外の農村部といたらもうしつちやかめっちゃかです。沿岸部の都市は社会主義の国ですなんて嘘でしょと言うしかないでしょう。

門脇 貧富の差がどんどん拡大していつてしまう…。

鈴木 祭りの話から少し離れてしまっています。ものごとを見るには一見離れてるんだけど、意外とそうじゃないところがたくさんあるんですよ。

門脇 祭りというのも「まつりごと」という意味では非常に政治に関わることで、離れているわけではないと思います。祭りがまさに政治に利用されているという意味で言えば的を得た議論ではないでしょうか。ただまつりごと＝政治

から始まったと言われながら、どうしても私は祭りというのは上からの祭りではなく、何か下から起こってくる草の根的なものであってほしいなと思うんですね。

鈴木 先日、「雀踊り」をボロクソに言ったんですけれど、その考えは今でも同じです。だけれどこれが30年50年と続いて次の世紀も続いていったというのなら、これはすごいと思うんですよ。それだけ続くだけの何かが出て来るというか。自分の好きな「おわら風の盆」なんかも最初は「何あれ」なんて言われていたのかもしれない。そういう中で少しずついいものを取って悪いものを削ってということをして、「雀踊り」もこれからやっていけば、ここにいる人たちがみんな死んじゃった後あたりからいい祭りになるかもしれない。

門脇 祭りとは何なのかと言った場合に、出し物のことではないと思うんです。祭りというのは結局のところ「場」だと思うんですよ。そこに開かれた場があって、みんなが集まってどういうことをしよう、去年はこういうことがあった、という話し合いがあって、やってみる。うまくいく、うまくいかない、そんな中でそれを乗り越えていく。そういう人が集まり実験をする場のことを祭りとかいرونな言い方をしているんだと思うんです。この「定禅寺ジャーナ

ル ウェブ版 デイベート編」もそういう場になつていくといいと思うんですけど。そういう意味では、かたちが変わっていてもいいわけですよ。 「雀踊り」をやっていたんだけど、それが息苦しくなってきたと。だから自分たちのグループだけで読書会をしようとか、そういうのもいいわけです。それが構成員の人たちが自ら選んで行って来たことならば。それがその「型」だけ生き長らえさせようとかいうのが問題なのかもしれないですね。

鈴木 去年から私、仙台のいろんな祭りの「はずれ」を見まくって来ました。私がやっているビッグイシューのお店(※一番町四丁目商店街と定禅寺通りが交差する三越前のスペース)の脇で、毎週毎週「はずれ祭り」ばかり見て来たんですよ。あんまりひどくて、逆に感心してしまふほどです。その中で感じたのは、普段騒がないでいる人が、嫌なことをわーっと忘れるようなものをやっているということ。祭りがどうだとかいうのではなく、ただ単に騒げると。騒いだ後に何か残るかという、残らなくてもいいんですよ。

門脇 面倒くさいことを地道にやったり決めたりにして、最終的に何かが起こる場というのではなく、簡単に集まれて、騒いで、あと腐れなく解散となる場が、祭りというかイベントとして

毎週行われているわけですね。

鈴木 コミュニケーションを図る場というか。

だけどその割りにゴミは片付けて行かないわ。

門脇 まさに行き場のない気持ちのゴミ捨て場みたいなもんですね。

鈴木 まあそうですね。実際その後、ゴミがすごいんですね。

門脇 それは象徴的ですね。

鈴木 そういう風に推理すると辻褄が合ってくるんですね。楽しんでる感じじゃないんですよ。ただわーっと騒いでる。

門脇 祭りの持つ悪い意味での本能的な部分が出てしまっているんですね。

鈴木 ちょっと仙台の祭りって、異質ですね。

門脇 それは祭りというか、「なんとか祭り」という名前がついたイベントですね。私がやっているコミュニティアートでは、基本全員ボランティアです。地域の方とか学生さんとかが集まっている企画し、当日に臨むわけです。例えば船橋の本町通り商店街でやっている「きらきら夢ひろば」というのに06年から参加していますが、この祭りは商店街と地域のNPOが連携して行っているもので、春と秋の年2回開催で、始まって10年近くになります。私も何度か出ましたが、ほぼ毎月会議をやっていて、みんなで意見を出し合い、手作り感のあるいい

祭りになって来ています。ところがどう間違っ

たのか前回、この5月の「きらゆめ」では商店

街が「移動動物園」を呼んで来たんですね。バ

ンでスタッフがひとりやって来て、つなぎを

着ているんですけど、檻を手際よく組み立て始

めるわけです。二時スタートなんですが、ピタ

っと時間になると動物を出して、また時間にな

るとピシッと休憩して、終わると手際よく後片

付けをして帰って行くんですね。それは我々が

てんやわんやで一回ごと試行錯誤しながらやっ

ているのに比べて無駄ひとつなく、非常に効率

的かつシステムティックです。人気も高かった

ですね。その横では我々のなんだかわけのわか

らない「震災カフェ」とか「ぶっ飛び募金箱をつくろう」とか：その対比が面白くて。鈴木さんが毎週見ている勾当公園あたりでやっているイベントも、その場所いくらでやって来て、どこでもやっているような屋台を組み立てて、終わるとその日の売り上げは、というのが多くを占めているような「祭り」なんじゃないでしょうか。

鈴木 朝早く実行委員みたいなのが集まって来るんです。だから「あ、そうか。今週末まぬけづらの連中が来たな」と。似たようなことをやっているんです、似たように。でも彼らにしてみれば一期一会的というか。そういうものを毎週

見ていると、ネット社会だとか言うけれど、全然知っているようで社会を知らないなど。

門脇 いわばコンテンツを増やそうということなんですよね。自分たちでできないから。

鈴木 コンテンツが増えるのはいいんですが、いつまでたってもへっぽこにしか過ぎないというか。玉石混交じゃなくて、はずれくじしかない宝くじみたいなもんですよ。全部買っても全部はずれみたいな。

「ジャズフェス」(※定禅寺ストリートジャズフェスティバル)にしても、ジャズのまちを目指しているとか言っても、その前から宇都宮がもうジャズのまちだというのがあり、川崎もそうだし、だいたい仙台は二番煎じじゃなく三番煎じ、四番煎じが多すぎるんですよ。市の方でピンと来ないといけないような人たちがへっぽこなんですよ。

門脇 「ジャズフェス」とか「光のページェント」に関しては仙台市はあんまり関係ないわけですよ。

鈴木 関係ないって言ったって、あそこに行ったら看板にドンとあるわけじゃないですか。関係ありませんって、関係なくありませんよ。門脇 今はどうなっているのかはわかりませんが、この起りとしては、この定禅寺りに店やビルを持つのおじさんたちがやっている

「ハロー！定禅寺村」というのが、何か面白いことをやろうと細々と始めた取り組みだったんですよね。その最初の取り組みというのは非常によかったと思うんですよ。それがどんどん人が集まり、集客できるぞこれは、ということになって：でも数年前に聞いた時の話ですけど、「ジャズフェス」は市から200万くらいしかもらっていないらしいんですよ。市がやっているクラシックの国際コンテストなんかは何千万と投入されているそうなんです、「ジャズフェス」は出演する方の参加費とカンパでまかかっていると聞きました。「ページェント」なんかも毎年同じことをやっていてどうなんだろうと思うのですが、起こりとしてはヒマやエネルギーを持って余したおじさんたちが何かやりたいというので始め、その人たちだけでなく他の人たちの気持ちをくすぐり、大きくなって、最初に始めた人たちの手が届かないところまでいっている、というのが「ジャズフェス」であり、「ページェント」なのではないかと。

鈴木 ところが、毒饅頭とか隠れ埋蔵金とかが出て来たんでしょう。だからそれにうごめいていろんないやらしいことが出て来てそんな風になっちゃったんじゃないですか。だから「やばい」となった時に彼ら逃げ足速かったですよ、本当に。

門脇 その「ページェント」騒動についてあまり知らないんですが。

鈴木 はつきり言って「六魂祭」なんて問題にならないくらいすごかったですよ。その時、私、そこで売ってたんですよ。ところが完全に売れなくなっちゃって、「ページェント」って何時から始まるの！」と千人以上から聞かれちゃって。門脇 点灯しなくなったんでしたね。LEDにするからといって不具合が起こってイルミネーションが見られなかったと。

鈴木 3日間くらいひどいのが続いたんですよ。水戸から来たツアーなんかはぶん殴られたりとか、はつきり言って無法地帯だったんですよ。主催者側もちろんよくなかったんだけど、見る人間もマナーがひっちゃかめっちゃかだったんですよ。

門脇 そんなんでしょうね。見に来た人は「金払ってるのに」という思いがあって、でも主催している方は入場料も何も取らないどころか、お金を出して見せているものもあるわけですが：それがうまくいかなかったというところで怒っているわけですね。

鈴木 「ページェント」についてはあまり言いたくなかったんだけど、何に対して私が頭にきているかというと、主催者側も市側も含めて、一番の修羅場の時にみんなどこかに行っちゃっ

てるんですよ。その場にいたのは、泉区のある警備保障会社の若いお兄ちゃんお姉ちゃん十数人だけだったんです。それで何十万人の人数に対応して。途中で自分も商売にならなくなっちゃったから手伝ったりしてたんです。4時間ぐらい二十歳そこそこの女の子が、自分に非が全くない、単なる場内整備で謝るのが仕事でもない中で、えんえんえん一万回、二万回と頭をさげたら人間壊れますよ。その一番ひどい時って彼らしかいなかったんですよ。しかもそれにに対して河北新報もそうだし、他の新聞もいっさい書いてない。なんでかという、記者会見に行ってるからですよ。記者会見なんてやる暇あるんだったら、もっと現場をきちんと見るべきだった。

門脇 今回の「六魂祭」でも、ものすごい怒りが噴出していて、観客のみなさんはプレスに「このことをちゃんと書いてください」と言っていました。どう書いたらいいんでしょう。

鈴木 ただ単に当日来てどうというのではなく、「ページェント」のあの経緯を知っているんだつたら…。

門脇 なるほど、経緯を書けと。

鈴木 結局、新聞記者はそういう見えないところを書けといたいところなんです。

門脇 その日こうだった、ひどかったという話

ではなくて、なぜこうなったのか、なぜ似たような失敗があってもその反省をいかせないのかを書けということですね。

鈴木 主催者側も駄目だし、マスコミも駄目。見に来る人間も駄目。すべて駄目だから頭に来てるんですよ。

門脇 その警備会社はたいへんでしたね。

鈴木 帰りなんか毎日泣いてるんですからね。

一ヶ月べろつとですよ。

門脇 弱い立場の人が割を食ってしまったということでしょうね。どうしてそういう人を出してしまうんでしょう。ひとつは、キャパシティを上回る集客をなぜ望むのかというのがあると思います。

鈴木 商店街の場合だったら、集客があればと言うんだけど、実際にいくつか話を聞いてみると、イベントがあると売れないそうです。イベントに行っちゃって商店街は素通りしちゃうんです。だから土曜日曜は意外とお店は混んでいません。三越だけです。だから日曜日に休む店もあるくらいです。

これはあえて言いますけれども、商店街の人たちにも駄目な人が多いんですよ。アーケード内での歩き喫煙は駄目だ、自転車は乗っちゃ駄目だとなっているにも関わらず、自分の顔が知られていないと思ってるのかわかりませんけれど、

ど、堂々とやっちゃう人がいっぱいいます。イベントで客が来ないんじゃないかって、そうした営業努力と全く反対のような、普段から売れなくなるようなことをやってるから来ないんですよ。門脇 非常にちぐはぐなところがあるということですね。客寄せのイベントをやっているにも関わらず、商店街が客が来なくなるようなことをしていると。商店は本来、品揃えやサービスなど店で勝負すればいいわけですよ。

鈴木 まあそうです。

門脇 それがなんでイベントをやっちゃうんだという話が一点ある。そしてそのイベントが想定を超えた集客をしてしまうことについて、いいことだと思ってるわけですよ。でもいいことなのか。

鈴木 実際、いいことではないですよ。例えばこれはタクシーの運転手に聞くとよくわかるんですが、イベントがある時に混むかという、混み過ぎちゃって仕事にならないと。それで逆に混まないところに行くそうです。そういう自主規制をやってる人が多い。彼らが一番機を見て敏というか。本当に歩合制でやってるんでその辺の感覚が自分に似ているというか、すごく鋭いんですよ。

門脇 イベントをやっている人は「いっぱい人を呼んでるんですよ」と。想定以上の人が来た

らうれしい悲鳴ではあれ、決して悪いことなわけはないと思ってるんですよ。どんどん発展していくこと、売れていくこと、お金が入って来るにこしたことはないと考えているわけですが、それは本当はどうなんだろうと。たくさん人が来ても、来てほしい人でなかったり、安全上の問題があったり、来た人に満足してもらえなかったり、的外れなことが起こっているんですよ。

最近、鈴木さんと仙台・長町で「定禅寺ジャーナル ウェブ版 長町まち歩き編」を始めましたけれど、長町にはある意味イケてない、場末感あふれる通りが見られる。それについてどう思うのか鈴木さんに、長町一丁目にある「フラワー通り」が目の前にあったのでこれを例にとってお聞きしたところ（「長町まち歩き編」2011年7月15日参照）、「この通りはこの周辺の人しか想定していない。それがいい」との話だったんですが、非常に興味深いお話でした。鈴木 自分のキャパがわかってるというか。門脇 うらぶれたといいますが、長町の中でも知ってる人がそれほど多くないような感じの通りなんです。旧4号線沿いに不思議な看板が立っていて。でも駄菓子屋があって、小学生から通っている子が高校生になっても通っているとか、うまいホルモン屋があるとか、場末っぽ



いキヤバラがあるとか、見る人が見れば素敵な通りなんです。たぶん何万人どころか百人も人が来たらパンクしてしまうようなところですよ。そういうところがどんどん人が来てほしいということになって本当に来てしまったら、「六魂祭」や明かりのつかない「ページェント」状態になってしまおうでしょうね。

鈴木 近くにそれとは全く反対の「ザモール長町」があるんですが、「ザモール」と「フラワー通り」の客はかぶらないんですよ。「ザモール」の場合、遠くからの集客も想定しています。岩沼や名取、川崎や山形、場合によっては福島方面からも。一方の「フラワー通り」は同じ太白区でも西多賀ですら「遠いんじゃないの」と思わせるこじんまりとしたい商店街だと思うんですけど。

門脇 その視点を祭りに援用すると、地域でつくってきた小さな祭り——仙台柳町の大日如来ですとか、このメディアアートの辺りでもありますよね、春日町の神社の小さなお祭りですとか——と「仙台七夕」や「光のページェント」との関係というのは、「フラワー商店街」と「ザモール」のような感じかもしれないですね。地域の風情ある祭りが好きな人は、あえて混み混みの「仙台七夕」や「ページェント」に行かないかもしれないですね。

鈴木 仙台の人っていうのは、祭りをただ騒ぐということと勘違いしているのかなと。いろんな祭りを見ている中で、静かな祭りというのは意外と多いんです。何が何でもドンガドンガやって、鼓膜が破れるぐらいじゃないと祭りじゃないと勘違いしているのかもしれない。

門脇 逆に言えばそういう趣向のある層が、巨大なイベント的な祭りに動員されていると言えるかもしれませんね。私はとにかく人が嫌いなんですよ。待つのも大嫌いです。そうすると巨大な祭りは行かないですね。逆に車で川崎町辺りを走らせている時に、寂れた神社で準備などしているのが目に入ると、おおこれは！ということになりますね。子どもの頃はイベントみたいな祭りに行きたい行きたいと思っていたと思うんですけどね。

鈴木 自分もそうだったんですよ。だけれど、当時の行きたいと思っていた祭りと今の祭りとを考えると、別のものに見えてしまうかと。門脇 祭り自体が変容している可能性があるかと。鈴木 あちこちから集まって来ている学生たちの実験の場、ラボ的な場、騒音実験みたいな、そんな風にとれるんですよ。門脇 若者がイベントをやる機会が増えているわけですね。

鈴木 地元じゃないからどうせ勾当台公園なん

てとってるんですが、実際あの辺りに住んでいる人もいますよ。

門脇 学生さんなり団体なりが、本当にその地域に入って何かやりたいことがあれば、商店街なり町内会なりいろんなところと顔馴染みになって——例えば肉屋さんでちよくちよくハムを買おうとか——そういう地道で日常的な営みがあって、認められて、やっとできるものなんですよ。ところがそれが勾当台公園であればもっと簡単に、書類を書けば市が許可して開催できると、そういうことになっちゃってるんじゃないでしょうか。

鈴木 書類うんぬんだけでなく、この間も定禅寺通りの私の売り場近くの小道と勾当台公園で音楽イベントが重なっちゃったんです。だから音楽じゃなくて完全に騒音になっちゃって、商店街の人たちも完全に頭にきちゃってました。門脇 それからどこかがそうしたものを後押ししてるんだと思うんですね。若い人がイベントをやることは自主性を育てたり社会に関わることだという感じで。もちろんそれも大事だと思うんですけど、ただ同じ年代層の中で同じようなことをやりたい人が集まってやってもあまり意味がないんですよ。

鈴木 ホームレスの支援団体が起・承・転で転がしまくってるというのと、若者のイベントと

というのが結がないところがすごくかぶるんですよ。仙台ってだから、回り続けている人が非常に多いです。

門脇 回り続けている…それで起・承・転なんですね。

鈴木 結がない。

門脇 それを「転がし屋」と呼んでいるわけですか。

鈴木 「転がし屋」と「転がされ屋」。

門脇 なるほど。世の中はそれを推奨していると思います。若者が社会に出て行っているじゃないかと。でもね、本当は違うと思います。それはただサークル活動がまちの中で行われているというだけの話で、学校の中でやるのとあんまり変わりがないと思います。「まちでアートをやる」とか言いながらアトリエでつくったものを持ただまちに持って来て置いているのと同じで、まちに関わるとか社会に関わるといふのはそういうことではないです。

鈴木 みんなでわーっとやるのはいいんだけど、本当にやりたい人ならひとりでもふたりでもという感じでやるんならわかるんですよ。だけど人海戦術でわーっと来て、とりあえずやってるんだけど、その後は何が残ってるのかなと。門脇 若者だけじゃないんじゃないですか、それ。大人もそういうことやってるんじゃないで

すか。

鈴木 そう。特に仙台はそういうのが多い。

門脇 だから若者にもそういうものしか伝授できない。

鈴木 伝授なんかしてないですよ。してないから「あいつらあんなことやってる」ぐらいの感じで…。

門脇 「なんか大きいことやってるぞ。リーダーシップ発揮してる」と。

鈴木 発揮しているふりをしてるだけです、残念ながら。

門脇 それが祭りといい、まつりごとⅡ政治といい、あらゆるものの出発点かもしれないですね。

鈴木 ヨサコイソーランというのをやっていますよね。あれは実はカタカナじゃないんですよ。国家騒乱の「騒乱」です。祭りでもなんでもなく、騒乱でしかありません。もうちょっと考えるべきだと思う。

門脇 まちでアートをやり始めた時、同じような活動をしている人たちが、「あなたたちの活動とヨサコイと何が違うんですか」と聞かれたそうです。「ヨサコイの方が人が集まるんだからあつちの方がいいんじゃないですか」と。それで言葉につまったそうですが、まさにそういうことだと思うんですね。鈴木さんの言葉で言えば

起・承・転で終わってしまったている。私の言い方で言えば、好きな人どうしが好きなことやってるだけで全然まちにも社会にも関わってないというところが問題なんだと。

鈴木 将棋にしても囲碁にしても、タイトル戦などプロ同士の対戦の後は感想戦というのがあります。感想戦までやってはじめて「結」なんです。勝敗というのは「結」ではなく、「転」の中の一分野に過ぎないらしいんです。祭りやイベントに関しても、終わった後に余韻を楽しみながら掃除をやったりいろんなことをしたりがあつてしかるべきなんだけれど、そういう余韻も何にもないというか。だから風俗に行つて女性を抱いたというのに近いんですよ。2時間たつたら「お客さん、延長ですから」みたいな。

門脇 これまで「定禅寺ジャーナル ウェブ版」で出てきた話題にもありましたけれど、これはお金もらつてどうこうというのは違うんじゃないかと。例えば医療についても、お金をもらつて職業としてやっているとだけではない何かがある。子育てについても育てておけば将来子どもからバックがあるからということ育てているわけ（だけ）ではないはずで、そうしたことと同じように祭りというのも、メリットとデメリットをはかりにかけて得になるからやるといふものではないですよ。それを騒いで

すつきりというメリットのためにやるからイベントになってしまい、ゴミ捨て場のような場になってしまう。

鈴木 私、高校野球ってあまり好きじゃないんですけど、でも試合で負けた次の日から悔しくて次の年の甲子園に向けて——大人や監督がどうだという前に、自分たちが悔しいから——というのをあるところで見たことがあります。私も武道をやっていて、同じような経験をしたことがあるんです。その中にはメリット・デメリットというものではなくて、今回甲子園に行けなかった育英にしても東北にしてもそうだけど、彼らたぶん野球に狂ってるんですよ。強い弱いじゃない、結局、狂うぐらいじゃない、ということろまでやっちゃってるんですよ。もちろんプロに行きたいとか個人的なものはあるかもしれないけれど。

門脇 そういう意味で、震災復興というものを掲げて行われているものも多く、例えば今回の「六魂祭」もしかりですが、いかに底の浅いものであるかということでしょうね。仮設住宅に入ることでこれまでのコミュニティが分断されてしまうという状況があります。その中で、イベント的なものでなく、祭りのなものによって復興していくために、「六魂祭」をはじめとしたイベントが反面教師としての役割を担っている

ことが、ここまでの議論で明らかになってきたと思います。

鈴木 悪い見本としてはこれ以上ないぐらいという意味ではよかったんじゃないでしょうか。門脇 仮設ではそうした意味で、悪いイベントが日々行われているのではないのでしょうか。

鈴木 そうですよ。悪いと言っても最近、様相が変わってきていると言うか。本当にいへんなところってまだあります。だけどお互いが悪代官と越前後屋に近いような関係になっているよ

うなどところも見られます、予定調和の中で。門脇 次々にイベントなり何なりがやって来て、それをかわすのがたいへんだみたいな話を聞きますね。

鈴木 あと「あそこの団体せこい」とか。「じゃああんたたちは何やってんのや」とか言うわけにはいかないんですけれど、あんまりそうなくていくといい交流だったものがそうじゃなくなっちゃって…。

門脇 まさにそこが必要なのがイベントのようない一方的で暴力的なものではなく、時間をかけていっしょにつくっていく祭りのような取り組みが必要なんでしょうね。一回やって帰ってしまうようなイベントは鈴木さんが毎週見ているイベントと同じでしょう。

鈴木 いいものはかたちにとらわれないと思

ます。前もふれましたけれど、中越地震があった年の大晦日に、同じ新潟出身の小林幸子さんがトリで、いつものギンギラギンでなく、質素な和服で「雪椿」を歌ったんですよ。今まで聞いた「雪椿」の中で一番よかったというのもあるんですけど、彼らを代弁してくれたというか。歌詞もそうなんだけれど、雪国の人間の気持ちは雪国の人間にしかわからないところがあるじゃないですか。地震の中で雪が来て、でもあの歌を聴いている瞬間って、寒いことも、たいへんな目にあっていることも忘れちゃって歌に陶醉していたと思うんですよ。だからへっぽこなイベントをじゃんじゃんやりまくるよりは、質素でもいいものを選んできちんとやっていくべきなんじゃないかなと思うんですよ。

門脇 先週、東京で知り合いの劇作家・岸井大輔さんとディスカッションがあったんですが、静岡のたけし文化センターというところでは、地震の後、「トマトスープを作り過ぎちゃったから来ないか」というメールを出したんだそうです。もちろん作り過ぎているわけではなく、地震後ひとりである人もいるのではということを送ったそうなんです。30人ぐらい集まって来た。小林幸子さんにせよ、たけし文化センターにせよ、そういう計らいというのは必要なものでしょうね。自分がやりたいことをやるん

じゃなくて。

鈴木 これがAKB48あたりが歌ったって全然響かないと思うんですよ。同じ県出身の人がああいいう歌を歌うことに意味があつて、どんなにお金を積もうが関係ないんですよ。

門脇 直接行つてどうこうというよりも効いたでしょうね。

ここで今日参加できなかった太田和彦さんからツイッターでコメントが入っています。「祭りに限らずパッケージ化されたものに慣れすぎてしまったのではないですか。準備なり、ゴミの片付けなり、裏側の仕事があるはずなのにそれを忘れて表から消し去ってしまったっているような気がします」

鈴木 忘れてるんじゃない。最初から考えてないだけ。仙台にそんなにまともな人間が多いとは私は思わない。そんなにまともな人間がいるんならもうちよつと復興してると思う。

門脇 いわゆるイベントがメインじゃなく、その前後がメインだという企画があつたら面白そうですね。

鈴木 行為にばかり没頭しないで、その前後つてあるじゃないですか。

門脇 準備と片付けがメインだったら、催し自体は中止でも全然問題ないですね。

鈴木 一見、楽しくなさそうなことも工夫次第

で楽しくできるんですよ。その最たる例というのが「仙台ダストスポットミステリーツアー」

(※鈴木さんが主催する毎月第一土曜日に仙台のアーケード全部でゴミ拾いをする企画)です。まず名前だけ聞くとゴミ拾いじゃないじゃないですか。何してるのかなと考えさせるじゃないですか。実際はゴミ拾いなんだけども。目立つような時間にやるわけでもないし。あと傭兵を雇つてというところからしてあやしいじゃないですか。

門脇 これは素晴らしい企画です。素晴らしいんですけど、課題はゴミ拾いに人々は魅力を感じるのかということですよ。自分からここはダンジョンで、ラスボスはどれだと思像力を働かせないと全然面白くないんですよ。だから人を選ぶツアーですよ。

鈴木 選んできますね。正直言つて。

門脇 集客できちゃうというのは、結局それだけのイベントなんですよね。つまり、人が来ないというのは、人を選んでいるからというものもある。

鈴木 それもあると思います。

門脇 本当につまなくて来ないというのもあると思いますけどね。それはそれで興味がありますけど、どうつまらないのか。

ところで我々、「六魂祭」の翌7月18日、東京

から中川くんという若者―彼とはここ4〜5年、コミュニティアート・ふなばしの企画でいっしょに活動していたのですが―が来て沿岸を見てみたいというので、鈴木さんも誘つて3人で「宮城沿岸罰当たりツアー」に行つて来ました。朝9時に集合し、若林区から宮城野区、七ヶ浜、松島、東松島、そこから三陸道で南三陸町までという午後6時くらいまでのツアーを敢行しました。ツアーの最初の方は「定禅寺ジャーナル ウェブ版」のアーカイブで見ることができません。

最初は非常に牧歌的というか、若林区のかつて田だったところに今は草が生えているんですね。その草の中に瓦礫がぼつりぼつりと見え、まるで嘘のような牧歌的な風景が広がっており、正直つてはしゃいでした。車載カメラで撮影しながら軽口をたたきつつツアーを行っていたのですが、七ヶ浜そして東松島・東名地区のいまだ放置状態を前に、言葉を失つてしまいました。最後に訪れた南三陸・志津川では大きな瓦礫や建物はかなり撤去されていて、道も見えていました。その結果、鉄骨の残った水産関係の建物の床がきちんと掃除され、何らかの経済活動が行われている様子がうかがえたり、あるいはバラックのような建物でタバコや飲み物、雑誌やお菓子などが販売されている。そこ

で我々は瓦礫の真ん中で乾杯しながら一服することができました。東松島・東名のあまりにひどい放置ぶりの後、志津川でのこうした草の根の経済活動を見て、少し救われるような気持ちで帰って来ることができました。

鈴木 私の場合はちよつと門脇さんが感じたものと違います。いわゆる支援以外の目的で初めて現地に入りまして、その瞬間フラッシュバックが来しました。PTSDのフラッシュバックで状態がおかしくなりました。で、車から降りるのが嫌になるくらい怖くなりました。私はビビリ屋で、本当に帰りたくありません。だから経済復興どうのこうのとか、いろんなことを門脇さんはおっしゃってますけれど、私の中では正直言っておの場で初めて怖さを実感しました。それまでの自分というのは、「ひとり災害派遣」もそうですし、「汎用災害幕僚小隊」もそうですが、人命第一ということで、確かに景色を見ることは見ていましたけれど、ただ見るというだけで行ったのは初めてです。しかも見て回ったところというのは、去年私がことごとく仙台へと通って来たルートです。去年の姿が全くなかったということに打ちのめされました。まだそのショックから立ち直っていません。PTSDの恐ろしい部分というのは、何年何十年とか、時間がたつてどうというものではないことです。おそ

らく一生向き合っていかなくてはならないものだと思うんです。そうした自分の陥った目にはみんなにあわせたくないという思いで動いたわけですけど、リスク——自分が三回目のPTSDを患う可能性もある——もありました。それでも動いたのは、もしなかったとしても自分ひとりになるのと、自分が動かないで不特定多数がなるという場合、どっちなのかと考えたら、自分優先にはならないんですよ。そういうリスクを覚悟しながら現場に行つてフラッシュバックが出て来たという時に、私自身の身体が車から出るのを拒否したんですよね。ある程度予想はしていたんですが、衝撃的でした。

門脇 鈴木さんにはたいへんな思いをさせてしまつて…。

鈴木 いいも悪いも全て見なければならぬと思うんですよ。その中で自分の肌で、いろいろな部分で感じる事ができたのはよかつたんじゃないかと思えます。月1くらいで見に行くという中で、その目的というのを自分の中でどうとらえていったらいいのかと考えたりしまして。自分は普段は違うことをやっている方がいいのかなと。

門脇 僕の場合、月1くらいで遠くから知り合いがやって来るんですね。被災地を案内してくれないかと。4月から、今回歩いたようなとこ

ろを定点観測的に見ていますね。ドキュメンタリー作家が来て集団避難所の中でインタビューをしたり、アートNPOの理事長にそもそもが寒村地域を案内して「これは震災以前の問題だ」となったり。鈴木さんの場合、支援でもなく、いわば無目的という最も苦しいシチュエーションに置かれてしまったというのが今回のツアーだったんですね。

鈴木 非常時で、自分の持っているスキルを發揮できる「任務」というかたちでならシヨックにならないんですけれど、全然何もないという状況というのは今回初めてだったので身体がびっくりしてしまつたというか。

門脇 被災地から遠い地域の人が置かれた状態にやや似ているのかもしれないですね。被災地の状況は常にテレビを通じて見せられている。でも何ができるのかといった時に選択肢はほとんどなく、でも何かしないといけないんじゃないかという。実際、被災地から遠いところで震災直後そうしたことでまいつてしまった人も多かつたようですね。今後も出て来るんでしょうかね。

鈴木 今後出て来るのは放射能とかそういうものだけじゃない。目に見えない部分、精神的なものもそうですが、内臓や首から上の部分など、今からもつと出て来るかもしれないし。今、『ピ

『グイシュー』66号「自殺をさせない社会へ」が異様に売れてます。新聞ではまだ具体的に書いてないですが、一部の雑誌などでは岩手、宮城、福島の子の自殺者が今年増えているという事です。自殺までいなくても、避所にいるにないに聞わらずつとがまんを強いられた生活の中で――宮城では放射能がどうこうというのはあまりないとしても――まだまだ働けないという事で経済的なこと含めいろいろなかで死を選んでいる人がいっぱいいる。66号を買って行く人というのは、どういう考えなのかなど思っています。これを買う人って、うちに来ていろいろ話をしていくんですよ。最近の『グイシュー』は震災震災であまり売りたいくないんですけれど、過去のコンテンツには今に合うようなものがあつたりします。

自殺というのは鬱、PTSD含めてひとりで抱えたらよくない問題がいっぱいあります。ひとに話したら意外と何とかなることがあります。何でも自分で解決するのは無理です。そういう意味でも相談できる人をつくるべきなのかなと。うちのお客さんがけっこう話し込んで行くのは、話す人がいないとかで、「仙台にはあなたしか話をする人がいない」と真剣に言われるとそうなのかと思ってしまうし。

門脇 そうした何でも話せる場をつくるきつ

けが、本当は祭りなのかもしれないですよ。いろいろなものがケアされていくような、そうした営み全てが含まれているものが祭りという「場」なんですよ。

鈴木 10代20代の人たちだけでイベントをやるといっても悪い話ではないと思います。でも叡智ということ、頭脳ということに関しては年長者の意見を聞いてということがいろいろなことで必要になって来るんだけど、双方にそうしたコミュニティが存在しない場合、そうならずにくまなくことが起こったり。「おわら風の盆」では50代の胡弓の弾き手が80代の弾き手に怒られてるんです。「おまえ、キャリア40年しかないんだから」という言い方がされているのを聞いてびっくり返ったんですけれど。

「40年で短いんですか」と聞くと「短い。60年くらいやらないとわからない」と。普段は子どもをしなかったり、部下に対して指示を出しているはずなんですよ、50代です。その50代の男性が80代のお年寄りにかなりきついことをガツンと言われているのはすごいなと。こういうものが仙台でも出て来れば非常に面白いんじゃないかと考えてるんですけど。

門脇 それも「仙台ダストスポットミステリーツアー」といっしょでハードルがかなり高そうですね。

鈴木 かなり高いですね。

門脇 古い祭りだと誰かがもう仕切っちゃってるんだらうと。入りにくいか、風通しが悪いんじゃないかなど、旧態依然としたものを感じて、自分たちの新しい祭りをつくらうと、無数に鈴木さんの言う情緒のないイベントが多発しているところがあるんだらうと思います。人を選ぶところがものを面白くするステップなんですけれどもね。おかしなもの、たいへんなものに入り込んでいく手間というか。

鈴木 見てると手間もかけたくないんですよ。手間もかけたくない。けどいろいろやりたい。非常に勝手だなと思います。

門脇 それは集客もそうですけれど、効率とか能率とかいった概念と結びついているのかもできませんね。効率的に集客が出来てお金も落ちるといのがゴールだとすると、お金にもならず、年間通して準備しなければならぬ祭りというのには非常に非効率的なものです。

鈴木 祭りというのはもともと非効率的なものなんだから、効率的にしなきゃならないといういわれはないと思います。

門脇 そなんじゃないですかね。本来、非効率的な祭りを効率的に行う、例えば太田さんのいう「パッケージ化」のようなものを、実はみんなもうすす望んでいて、そこにぱーっと乗

つちやうと。そういう力学がある。

鈴木 なあなあ過ぎるというか。ベガルタ仙台と東北楽天の応援を見ているもわかるんですけど、凡打やふがいないことをやった時にブーイングをあまりしないんですよ。下手を打ったらやはりガツンとやらないと駄目だと思うんですよ。

門脇 それは自己規制なんでしょうか。

鈴木 本当に好きじゃないんでしょう。本当に好きだったら違いますよ。本当に優しいんだって違うと思いますし。楽天の山崎武司さんが仙台のファンの声援があつたかと言っていいんですけど、私はそれをそのまま鵜呑みにはできません。確かにそういう部分があります。彼は日本の中でもやさぐれた一番ひどい中日のファンの中でやって来ましたから。けれどビリだったり、打てなかったり、ボロ負けしたのを一年目だったらいと思うんですよ——何年も何年も……。今年は金が欲しくて星野仙一が監督になったけど、結局下の方にいるわけじゃないですか。それなのにも御用新聞みたいに叩かない。これもなあなあでやっている。

門脇 一紙でもボロクソに言うところがあつたら逆に顧客がつきそうですね。楽天を悪く言う新聞ということで。

鈴木 「悪く」というのではなく、正直に書け

ばいいんです。全部が大政翼賛会的なんですよ。門脇 楽天に期待していないと。

鈴木 本当に好きじゃないんでしょう。本当に好きで愛していて、大切にしたいというのなら、その分言うでしょう。違いますか。

門脇 そのへんが祭りともいっしょなんじゃないか。

鈴木 福岡ホークスのファンなんて、下手打つたらすごいですよ。

門脇 それは気質というわけではないんですか。

鈴木 気質というだけで片付けたくないです。私は。長年かかって嫌な部分が嫌なように培われたドロドロさを感じるんですよ。

門脇 何が影響しているんでしょう。

鈴木 私はもうすぐ仙台2年目です。1年目に關しては仙台についてある程度わかった部分があるんですけど、2年目はその得たいの知れないドロドロの部分って一体なんなのか、そういうのを見ていききたいなど。

門脇 それは重要かつ面白いテーマですね。

鈴木 つかみどころがないんですよ。人口が百人くらいしかいないと思います。

門脇 なるほど、種類がね。

鈴木 人間のような人はいるんですが、人間じゃないというか、アンドロイドというか。

門脇 仙台というのは、人をして「ニュートラ

ル」や「パッケージ」を好む方向性へと変えていく場なのかもしれませんね。そういう磁場が働いている装置が「仙台」という場なのかもしれない。それがいかなるメカニズムでそうなっているのか、これを探求していくことは、我々が「仙台」という場でものを語る上では非常に重要なことではないでしょうか。それがこの「定禅寺ジャーナル ウェブ版 デイベート編」である程度解明できたら、大変なことになりますね。

鈴木 大変なことになりますが、そう簡単にはできないですね。ここでやっている間はできないかもしれない。

門脇 解明したからどうだという話もあるでしょうしね。

鈴木 それがわかったら違う方法で爆弾をあちこちにぶん投げ始めるかもしれないし。

門脇 震災がなかったらこんなことを語ることはないかもしれない。私に關して言えば確実にそうです。これまで「仙台について考えよう」などは一度も思ったことがありませんでしたから。

鈴木 毒を持った膿みというか、毒饅頭のようなもの、それに近いものがいっぱい見えるんですよ。震災を機にそうした悪いものというのはなくした方がいいんじゃないかなと。

門脇 鈴木さんはこの「ダイベート編」の一回目から仙台についてこだわりを持って話していますけれども、我々が目指すのはこの「仙台」がいかなる場なのか、震災によってそれがどう見えて来たのか——このへんでしようか。

鈴木 「汎用災害幕僚小隊」の最終日に、仙台市若林区のある瓦礫の山の横で、私たちは最後に瓦礫を見ながら考えたことがあったんですよ。自衛官OBを中心として10人くらいで今回やって来たんですけど、改めて思ったのは、戦争はやつちや駄目だなということでした。意外に思われる方もいらっしゃると思いますけれど、私たち自衛官やそのOBというのは、一般の方よりもはるかに戦争反対の人間が多いです。理由があるんです。私たちは実際に武器を使って教練をしたり、実弾射撃をしてきて、この武器を使ったらどういふことになるのかということを感じながら任務をやって来たわけです。こんな小さな小銃20連射をどどんとやっただけで、たぶんこのメディアアタックの人って、みんな死んじゃうと思うんです。そんなたいしたものじゃなくてもそれくらい殺傷力があるわけですから、原爆や今回の原発など規模が大きくなったら何百万何千万、下手したら日本が吹っ飛ぶくらいなんじゃないかと危機感を持っています。8月も近いですし、今我々はこの瓦礫を

前に、これを単なる瓦礫と考えるのではなく、反戦ということ踏まえて捉えていかなければならないというのを次回からやりたいと思います。今回の震災は教訓というにはあまりに大きなものだと思いますけれども、8月6日、9日、15日と、広島・長崎に原爆が落とされ、終戦を迎えた日です。あとはもうひとつ、26年前の8月12日に御巢鷹に日航ジャンボが落ちたという、私にとって非常に因縁深い月なので、8月はこういう時でしかないテーマということ、**「震災と反戦」**をやりたいと思います。門脇 今回の震災に関して、「爆心地」という表現を散見しました。また、NHKの連続ドラマ小説でも戦時中を扱ったドラマを放映中で、かなり支持されているそうなのですが、死と隣り合わせ、あるいは死を間近に見、ほんの偶然にしか思えないわずかな差で生死を分けたりという震災が震災と重なり、共感と呼んだらうと思います。一瞬で多くの人が命を奪われてしまう、この理不尽さ。しかも震災は人為的なものではありませんが、震災はそうではありません。震災から4カ月がたち、人心も落ち着いてきていますが、戦後の話を読むと半年を過ぎてはまだ普通に食糧難にあえいでいたりする。また、記憶を語り継ぐという点からも震災と戦災には共通した重要性が存在します。震災から戦

災、戦争、反戦について新たな光を当てたいと思います。出演者や参加者も募集しております。

鈴木 ネットどうのこうのというより、実際に来てもらって話を聞いてもらったり話をしたりというのは非常にいいことだと思います。門脇 この中継を見ている方で誤解されている方がいるかもしれませんが、ここは鈴木さんが出演者をめちやくちやに叩いたりする場ではありません。今日は「震災と祭り」というテーマで議論してきましたが、その中で祭りは場であるという意見が出て来ました。ここで語り合うことでひとつのコミュニティができていくような、そうした場に行きたいと思っています。祭りでは祭りという行為を通してそれが成立していくわけですが、ここではダイベートというあるテーマについて語り合うことでそういう場をつくっていけないかというのが「定禅寺ジャーナル ウェブ版 ダイベート編」の意図するところなんです。自分には何も意見がない、と思われる方もいるかもしれませんが、どんな人にも経験がある。例えば震災体験というのは絶対的な体験だったと思います。どの人の体験が一番とかそういうのを超えている。しかし実は震災体験だけでなく、人生体験そのものも、絶対的な体験はずなわけです。そうした経験を語り合う



ことで場が出来ていったらと思います。

鈴木 同じことはないですからね。必ず感じるものって、違うものがある。

門脇 全くです。ということ、今日は4回目の「定禅寺ジャーナル ウェブ版 デイバート編」、「定禅寺ジャーナル」編集長の鈴木太さんと現代アーティスト門脇篤がお送りしました。ありがとうございます。